

国宝高松塚古墳壁画修理後の保存方針に係る検討会での主な意見

【総論】

- ・ 現在、壁画は修復作業中ではあるが、危機的な状況であり、石室に戻すことは壁画の保存・活用という面から問題があるのではないかと考える。墳丘自体もこれ以上の破壊はできないと考える。
- ・ 保存上の議論が先行するのは当然だが、国民の財産、世界の方々の財産という視点から、活用の方向性を常に検討してほしい。
- ・ できるだけ劣化を進めない形での保存と、現状を再現できる施設が必要。
- ・ 現在非常に良好な環境の下に修理作業が行われており、それがうまく完成、終了したら、その良好な環境を石室の中にどのように確保して戻すかが課題。
- ・ 最終的には現地に戻すという考えは守っていくべきだ。ただ、いろいろな問題を抱えているので、15年後に戻すとか20年後に戻すというように、議論を拙速・限定的に行う必要はないと思う。
- ・ 将来の現地保存に向けて、考えられる課題や、必要な装置等といったことを含めた考え方をまとめてはどうか。
- ・ 時間がかかっても、将来の現地保存に向けて研究し、良い方法を模索する姿勢を常に持つことが必要。
- ・ 床の石は国宝に指定されていないため、石材の強度としては弱くても、特別史跡の墓としてのあかしとして、床石だけに戻すということも考えられるのではないかと考える。
- ・ 現地に戻した場合、人に見せるのか見せないのか、見せない場合に壁画の状態をどのようにチェックし続けていくのか、さらには今後起こるであろう震災などに対してもどのように対応するかということを考える必要。
- ・ 石室ごと取り出した壁画が公開されるようになっている状況を踏まえ、現地保存とはどうあるべきかを考える必要がある。古墳の中に石室に戻すことだけが現地保存なのか。壁画も墳丘も保存しようとした場合の現地保存の在り方を考えるべきだ。
- ・ 発掘した時点で、オリジナリティはなくなっている。「現地」、「戻す」ということの意味を厳密に考えるべきだ。
- ・ 高松塚古墳壁画の保存に係る技術が、全国の装飾古墳の保存と活用にもいかしていけるものであると良い。

【壁画の保存】

○カビ等の生物被害

- ・ 劣化原因調査検討会でもいろいろ議論されたとおりにカビの問題は避けて通れない。また、人為的な劣化が起こり得ることも避けて通れない。
- ・ 生物という観点では、現状では、現地保存する場合には、生物被害が進む可能性が強いと考える。

- ・ 劣化原因調査報告書で指摘されているように、高温多湿な我が国の文化財を取り巻く環境下で、特に生物制御への対応策が現時点でないのであれば、壁画の現地保存は得策ではないと考える。墳丘にこれ以上手を加えないのであれば、カビ等の影響を受けない環境を確保するのは難しい。
- ・ 現地保存する場合、外界に比べると振れ幅は少ないものの気温の変動があり、結露等の問題が懸念されるが、現在のところ、石室内の温度管理を適切に行うための有効策があるとは言い難い。
- ・ 湿度制御の観点からは、現状では現地保存は非常に難しいと考える。

○漆喰の劣化

- ・ 壁画が危機的な状況であるという認識。
- ・ 現在、壁画は修復作業中ではあるが、危機的な状況であり、石室に戻すことは壁画の保存・活用という面から問題があるのではないかと考える。

【石室石材の保存】

○石材の強度

- ・ 石材の強度は含水率が高いと落ちるが、現在石材が置かれている修理作業室は石室解体前よりも乾燥した環境にあるため、石材の含水率は石室解体前よりも下がっている。しかし、乾燥によりある程度強度は高くなっても、実際には石材の強度としては非常に低い状態にあると考えられる。

○構造体としての石室の強度

- ・ 16枚の石材を再度組み直して現地に置くとすると、地震等があった時に石が倒れる危険性があり、現地に戻すのであれば、いかに石材を安定させるかが課題。

【墳丘の保存】

○整備

- ・ 現地保存に当たっては、地割れ等があり、水や生物が入り込む危険性があるオリジナルの墳丘部分についてどのように改善するかが課題である。
- ・ 地震等による亀裂が入った墳丘では、すき間から侵入する雨水や虫等についての対策をどうするかが問題。
- ・ 墳丘の抜本的な再構築は選択肢としてあり得るのかどうか問題。

○保存施設

- ・ 発掘調査で石室を取り出したときの空間と、当初の空調施設、墓道に当たる部分など、既に墳丘が失われている部分でどれだけのことができるかという具体的な実験を進めてみるということもあるのではないかと考える。
- ・ 現地保存ということで墳丘上に保存施設を作り、これ以上墳丘の破壊を招くようなことになれば、考古学の立場からは大問題であると認識している。